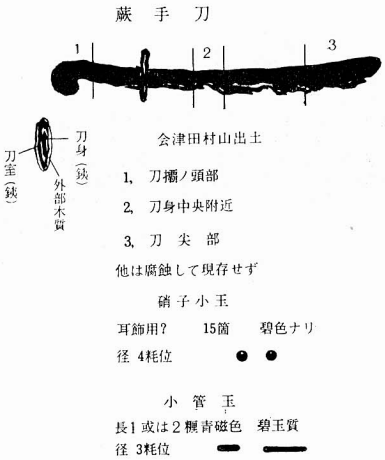
年前、その終り頃とみて、おおよそのまちがいはないものと思う。

田村山古墳については、発掘して間もなく視察した坂内萬の報告がある。(会津田村山部落に於ける古墳　昭和十四年二月、歴史と地理)これによれば、天明中、灰塚というのから管のような青石数枚と破鏡を発掘したという新編会津風土記にのっているものは、既に原形を認め得ないまでに破壊していたという。「会津温故拾要抄」には灰塚は高さ六尺、周り二十間余、その東三十間余に糠塚というがあり、高さ九尺、周り三十間余、東西相並ぶ。とあり、糠塚の方が主墳で、灰塚は陪墳のようにみえる。現在塚の腰といっているものは、この糠塚に相当しているかと思う。

昭和十一年灰塚を発掘した時、副葬品として漢鏡?青銅?原形を止めないまでに破損、(内行六花鋸歯文鏡)、もう一面半月鏡、これは文様はなく、表裏共に青銅のような光沢があった。それに、蕨手刀、これはその後佐賀瀬川からも見事なものが発掘されたが、分布が東北地方にかたよっている珍しいもので、そのスケッチを掲げてみる。硝子小玉、小管玉なども出土している。これらは現在県文化財として指定しているものと同じ物であろうと思うが、現在村人は糠塚出土と伝えているのに、この報告では灰塚としている。

田村山古墳出土の蕨手刀



(坂内万著会津田村山部落に於ける古墳　歴史と地理昭和14年2月による)

北会津村は大川・宮川の複合扇状地の開墾地であるから河原・湿地が多い上に、表土で蔽われていても、薄皮まん